

ちかまつうるる読本

ザ近松

ちかまつ

第一巻 近松を味わう



鯖江発

はじめに

さばえ近ちかもんくん松 倶楽部と鯖江市教育委員会では、『ちかまつうるる読本 ザ・近松』全三冊を発行いたします。

「ちかまつうるる」の「うるる」は、各巻の副題となっています。第一巻「近松を味わう」、第二巻「近松を知る」、第三巻「近松を旅する」から、末尾の文字を取って名付けました。

近松の浄瑠璃を見る、その生涯・人となりを学ぶ、ゆかりの土地をめぐる……そういった折に、ポケットに入れたり、カバンにしるばせたりして、気軽に利用できる手のひらサイズのかわいい冊子です。末永く愛用くださいますようお願いいたします。

さて、近年、文章を声に出して読む「音読・朗読」がひそかなブームをよんでいます。音読用に、古典作品や詩歌、物売りの口上など、歴史のなかで吟味され生き抜いてきた名文・名文句を選び出し、一冊にまとめた本がベストセラーにもなりました。その中に、近松門左衛門の代表作である『曾根崎心中』のお初はつ・徳兵衛とくべえの道行部分みちゆきが選ばれています。

この世のなごり。夜もなごり。

死に行く身をたとふれば　あだしが原の道の霜。

一足づつに消えて行く。　夢の夢、そあはれなれ……

これは、古来、名文として知られてきた文章ですが、あらためて声に出して読んでみることで、多くの人が近松作品の魅力をしみじみ味わうきっかけになったと思います。

近松の作品、名文句は、ほかにもたくさんあります。この巻では、近松作品の中から代表的なものを選び出し、やさしい言葉で解説をつけました。劇場で鑑賞したり、その作品について知りたいと思ったときに、まず最初に開くガイドブックとして役立てば幸いです。

最後になりましたが、冊子の編集にご協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。同時に、『ちかまつうるる読本　ザ・近松』を通して、近松愛好の輪が一層広まることを祈念し、巻頭のごあいさつとします。

目次

はじめに

近松への招待

中村鴈治郎氏 直筆メッセージ

吉田文雀氏 インタビュー

8 6

第1章 近松名作案内

『曾根崎心中』

16

『冥途の飛脚』

18

『夕霧阿波鳴渡』

20

『心中天の網島』

22

『女殺油地獄』

24

『心中宵庚申』

26

イラストストーリー 『けいせい仏の原』

28

『出世景清』

36

『けいせい反魂香』

38

『姫山姥』

40

『国性爺合戦』

42

『平家女護島』

44



コラム 宝蔵1 「近松の名作あれこれ」 46

第2章 文楽を楽しく見るために

人形浄瑠璃(文楽)の歴史 48

舞台の構成 50

人形 52

大夫・三味線 54

首(かしら)いろいろ 56

文楽豆知識 58

コラム 宝蔵2 「文楽に行こう！」 60

第3章 歌舞伎と近松

歌舞伎の歴史 62

特別寄稿 近松の歌舞伎 64

園田学園女子大学近松研究所

コラム 宝蔵3 「平成の藤十郎・中村鴈治郎」 68

巻末付録・近松全作品目録

資料提供一覧

あとがき

大勢

三

存治郎



近松への招待



人間国宝

三代目 中村鴈治郎 なかむら・がんじろう

[屋号] 成駒屋(なりこまや)

昭和16年、二代目中村扇雀(せんじゃく)を襲名して初舞台。平成2年、三代目中村鴈治郎を襲名。平成17年には、上方歌舞伎の大名跡である坂田藤十郎を、231年ぶりに襲名(四代目)することが決まった。昭和56年に自ら結成した近松座では、近松の残した作品を、原作の精神を尊重しながら歌舞伎として上演し続け、大きな成果を挙げている。平成2年、紫綬褒章(しじゅうほうしょう)。同6年、重要無形文化財保持者(人間国宝)。同7年、紺綬褒章(こんじゅうほうしょう)など受賞歴多数。

※右ページの直筆揮毫(きごう)は、今回、当読本第1巻の発行にあたり、中村鴈治郎氏からお寄せいただいたものです。

人間国宝 吉田文雀氏インタビュー



嬬山姥（こもちやまんば）

吉田 文雀 よしだ・ぶんじゃく

昭和20年、文楽座に入座。昭和25年に三代目吉田文五郎の門下となり、吉田文雀を名乗る。主役級の女形だけでなく、幅広い役を遣いこなし、作品・役に対する深い解釈から生まれる、格調ある演技は、高く評価されている。豊富な知識、経験により、昭和38年から現在に至るまで公演に遣う人形のかしらを決める「かしら割り委員」を務める。

昭和57年、国立文楽劇場第1回文楽賞大賞。平成3年、紫綬褒章（しじゅほうしょう）。同6年、重要無形文化財保持者（人間国宝）。同11年、勲四等旭日小綬章（くんよんとうきょくじつしょう）など受賞歴多数。

近松作品の思い出

——文雀先生が、人形遣いの道に入られて半世紀以上たつわけですが、その間に近松門左衛門の作品のなかでいろいろな役をお遣いになっておられると思います。先生が心に残っている作品や役はございますか？

文雀 ●もう、いろいろな役をさせていたただいてますけども…。『大経師昔暦』のおさん、『鑓の権三重帷子』のおさいなどが、印象に残ってますね。もちろん『心中天の網島』は、人気のある狂言で、よく出ています。おさん、治兵衛、小はる、孫右衛門など…。

あと好きな役柄では、『長町女腹切』の半七のおぼ。自分としては、随分思いを込めて遣ったんですけどね。これは、あんまり作品そのものが評判にならなかったですがね（笑）



大経師昔暦（だいきょうじむかしごよみ）

近松は難しい？

— 近松の作品については、演じる側としてどのような思いを持っておられるでしょうか？

文雀 ● 人形浄瑠璃を創生期に確立したのは近松ですし、その意味で偉大な人ですが、実は近松の作品は、我々にとっては、舞台にかけることがやりにくい。一番難しい作者です（笑）。

まずは、人形が今と違います。近松が死んでから三十年くらいたって、やっと今の「三人遣い」が始まったわけで、現代の舞台と、人形の遣い方や構造そのものが、全然違うからね。

また当時は「一人遣い」だけじゃなく、糸あやつりなんかも併用していたに違いない。『百合若大臣野守鏡』の鷹の精や、『用明天王職人鑑』の高砂の松のところなどがそうですよね。

— 「からくり」なども使っていた…。

文雀 ● そうそう。当時は狭い限られた舞台だからできる。現代の大きな舞台上で上演するには、原作どおりできない部分がある。

また、近松はんは芝居の台本にしても、筆にまかせて書いているところがあって、文章も「字余り、字足らず」のところが結構あるんです。そのままの文章では語りにくいと思います。

近松当時の浄瑠璃は、「語り」が主体でしょ。目で見る人形は、お添えものになるわけでしょう。

——私たちはどうしても、文学として、読み物として近松をとらえることのほうが多いわけですが、舞台芸術としての近松は、また違う部分があるということでしょうか？

文雀 ● 近松はんの作品は、文章的には大変なものとおっしゃるでしょうけど、演じるほうは、よっぽど心理描写など考えてやらないと舞台にならない。『女殺油地獄』^{おんなころしあぶらごころ}でも、与兵衛が、お吉に甘えて「金貸してくれ」というのが、途中で、はつと「殺そう」という風になるところなど、同じ人形の顔で変わらないのに、殺意

を見せるといふのは、よっぽど技術が非凡でなかったらできないことですよな。

『曾根崎心中』の堂島新地天満屋の段で、辰松八郎兵衛はどんな女形遣うてたのか。おはつが縁の下に徳兵衛を隠して、足で合図するところなんか、昔はどんなことしてたのやろかと思えますけどね。裾から手を入れて人形遣つてるのに……。このあたり、人形と語りの関係がどうだったのか、非常に興味のあるところですが、具体的な人形の遣い方については全然残ってないですからね。

現代に生きる者が共感できる舞台を

——そうですね。実際、江戸時代にあつても近松が亡くなってからは、彼の作品も原作どおりはあまり上演されず、改作で上演されることが多かったという事情があります。そういうわけですから、現代、近松作品を演じるときには、作り手側としてご苦労があると思うんですが……。
文雀 ●私どもはお客様あつての舞台ですからね。今の時代にどう表現したら、お客様に理解していただけるか、納得していただけるか、それが大切なんです。

原作が基本となることは間違いないですが、やはりいろいろの作品について、現代の若い人や京都・大阪以外の全国のお客様が見て下さって、何を言っているのかわかるように、文章を抜き差ししたり、書きかえたりすることも必要となってきます。近松作品には、言葉遊びの部分が多いでしょう？『曾根崎心中』の「観音巡り」とか。そういう筋とはあまり関係ないところをカットするとかね。

で、『曾根崎心中』も文章をわかりやすくして大成功し、その後、国内だけでなく、海外公演でも必ずヒットする作品になったんです。それを学者先生などは、「近松」とかお書きになる場合もあるんですが（笑）。

近松だってこしらえたときは、お客様があってこしらえたわけでしょう？お客様を喜ばせる娯楽なんですからね。現代の生活をしているお客様が見て、共感を得られるような舞台を作らなくちゃいけないんです。

お芝居を見にこられるお客様は、高い入場料払って、持って帰られるのは切符の半分だけです。芝居見て「ああ、おもしろかった」とか、「悲しかった」とか、

近松への招待

「あそこで心打たれた」とか、そのときはそう思われて満足してお帰りになって、それが忘れられてもなんかのときに、「そう！あのときのあれ、よかったなあ」と思うてもらえるような舞台を作らんならん、私どもは。そう思うて、一生懸命に務めさせていただいてるんですが…。

——これからも鯖江の近松ファンと一緒に、素晴らしい舞台を期待しております。今日は貴重なお話をありがとうございました。

◎対談日…平成13年8月28日

◎聞き手…福井大学教育地域科学部教授

三好修一郎（さばえ近松倶楽部顧問）



第一
章
近松名作案内

浄瑠璃・世話物

「曾根崎心中」

◎初演 元禄十六（一七〇三）年五月七日 竹本座

「この世の名残り、夜も名残り…」

あらすじ

上之巻

（観音巡りく生玉社の場）

天満屋の遊女お初が大坂三十三番の

観音巡りを終え、生玉の社に着いた。お初はここで恋人の醤油屋平野屋の手代徳兵衛を久しぶりに見かけ、その出会いを喜ぶ。実は、徳兵衛におじである平野屋久右衛門の女房の姪との結婚話が進んでいたが、お初のことがあり断る。このため、おじから持参金の返却を迫られる。徳兵衛はこの持参金を、継母から取り返すことはできたが、これを友人の油屋九平次に貸してしまう。「必ず取り返す」と徳兵衛は語る。そこへ九平次が町衆と一緒に通りかかったので、九平次の実印の押された証文を見せ、その返済を迫ると、「借りた覚えはない。証拠の証文も偽物だ」などと汚名を着せた上、徳兵衛を散々な目にあわせる。心身ともに傷ついた徳兵衛は、その場を立ち去る。



中之巻（しじみがわ 蜷川 新地天満屋の場） その夜、天満屋では

お初が昼の事件を案じていると、徳兵衛が来る。お初は縁えんの下に隠した。そこへ九平次が現れ、徳兵衛の悪口をいう。お初は縁の下の徳兵衛を足で押さえ、ひとり言になぞらえて、それとなく死の覚悟を伝え合う。深

夜、二人は手を取り合って天満屋を忍び出る。

下之巻（みちゆき 道行 曾根崎天神の森の場） 曾根崎天神の森についた二人は、永遠の愛

を誓いながら、「松、棕櫚しゅうろの一木ひときの相生あいおい」にからだを結びつけ、この世に別れをつける。

見どころ 近松最初の世話浄瑠璃です。女形の人形遣いの名手辰松八郎兵衛たつまつはちろうべえがお初を遣ったこと

でも評判になりました。天満屋の見世先、縁の下に潜んだ徳兵衛がお初の素足に頬を寄せ、互いに死の覚悟を伝えあう「肉感的」な場面が一番の見どころです。人形の動きが真に迫っていて、見事です。現行の文楽の『曾根崎心中』は、昭和三十年に改訂復活されたものです。歌舞伎では、昭和二十八年に宇野信夫うののぶおが脚色したものが演じられています。

浄瑠璃・世話物

「冥途の飛脚」

◎初演 正徳元（一七一二）年七月以前 竹本座

「ああ、生きられるだけこの世で添おう…」

あらすじ

上之巻

（飛脚屋亀屋）

大坂淡路町の

飛脚屋亀屋の養子忠兵衛は、丹波屋

八右衛門

からの預かり金五十両を、以前から入れ込んでいた新町の遊女梅川の身請

け金の一部に流用する。同情した八右衛門は、いったんは返済を待つ。その後、忠

兵衛は、侍の屋敷に届ける公金三百両を懐に出かけるが、その身はいつのまにか新

町方面へと向かう。

中之巻

（新町越後屋）

新町の廓の茶屋越後屋の

二階。八右衛門が現れ、忠兵衛を、梅川に寄せつ

けないよう遊女たちに頼む。そこに現れた忠兵衛

は、八右衛門と口論になり、「男の一分（面目）

捨てさせた」と懐の中の三百両の封印を切り、八



右衛門に五十両を投げつける。公金に手をつけることは大罪。残りの金で梅川の身請けをした忠兵衛は、梅川を連れて逃げるように廓を立ち去る。

下之巻（大和への道行く新口村）二人は、忠兵衛の実父孫右衛門の住む大和国新口村にたどりつくが、ここにも詮索の手はのびている様子。隠れ見している二人の目に、時雨のなか、道を急ぎ、泥田に転ぶ孫右衛門の姿が見えた。梅川は思わず飛び出し、孫右衛門を介抱する。すべてを悟った孫右衛門は、梅川にお金を渡し、逃げるように促す。二人は父親との名乗りも果たさず、急いで姿を消すが…。

見どころ 非常に上演回数が多い作品ですが、初演後は長く「傾城恋飛脚」「恋飛脚大和往来」など改作物で上演されてきました。これらの改作では、八右衛門が忠兵衛の「封印切」をさかんに挑発するなど、典型的な敵役として描かれます。また下之巻「新口村の段」でも、雪が舞い散る中、親子が目隠しをしたまま対面する場面を作るなど、原作にはない通俗的な趣向が目立ちます。一方、この作品では、何といっても、ヒロイン梅川が忠兵衛に注ぐ心情の美しさに胸を打たれずにはいられません。彼女が忠兵衛と連れ立って破滅への道をたどるとき、そこに私たちは、時代を超えた究極の愛のかたちを見ることでしょう。

浄瑠璃・世話物

「夕霧阿波鳴渡」

◎初演 正徳二（一七二二）年初春 竹本座

「ナンバーワン遊女・夕霧の面影伝えて三十五年」

あらすじ

上之巻

（新町吉田屋）

年の暮れ、餅つきでにぎわう大坂新町の揚屋吉田

屋で、阿波の若い侍に呼ばれた扇屋の遊女夕霧と、夕霧に入れ込んで勘当中の藤屋伊左衛門が、二年振りに顔を合わせる。夕霧は、阿波の侍平岡左近に、左近の子と欺いて預けた伊左衛門との子どものことを話し、二人で案じている。そこに、阿波の若い侍、実は扮装した左近の妻お雪が現れ、「子どもをそのまま私たちの実子として育てさせてほしい」と頼む。

中之巻（平岡左近借屋敷）大坂上本町の平岡左近の借屋敷に、お雪の心くばりで乳

母として雇われることになった夕霧が到着。かごかき姿で同行した伊左衛門とともに、立派に成長した平岡家の跡取りである我が子源之介と対面、すがりついて泣く。その様子を見た左近は、お雪の反対も押し切り、源之介を両親ともども追い払う。

下之巻（新町扇屋）再び扇屋に引き取られた夕霧は、病が悪化し、明日をも知れぬ命。そこへ、伊左衛門親子があわれな芸人姿で現れ、主人の温情で夕霧と対面する。お雪の使いと伊左衛門の母もかけつけ、「せめて廓くわの外で往生おうじょうさせたい」と、それぞれ夕霧を請け出す大金を持参する。これを受けて力を得た夕霧に、奇跡が起こる。



見どころ 夕霧は大坂の歓楽街である新町で、絶大な人気を誇った実在の太夫たゆう（最上位の遊女）です。延宝七（一六七九）年正月、二十二歳（一説には二十七歳）の若さで病没した後、その人気をしのいで、夕霧を主人公とした劇が数多く上演されました。近松と名コンビを組むことになる歌舞伎役者坂田藤十郎さかたとうじゅうろうは、伊左衛門役で一躍スターとなり、生涯十八度も夕霧劇に出演したと言われています。夕霧没後三十五回忌を記念して書かれた人形浄瑠璃『夕霧阿波鳴渡』は、他の世話物作品とは違い、心中や犯罪などの事件は起こりませんが、近松が自慢のすばらしい筆さばきで書き上げた叙情的な作品です。近松はこの作品で、初演三年前に没した藤十郎の芸をしのいでいたのかも知れません。

浄瑠璃・世話物

「**心中天の網島**」

◎初演 享保五（一七二〇）年十二月六日 竹本座

「人間の純粹な愛情が、悲劇につながり…」

あらすじ

上之巻

（大坂曾根崎新地河庄）

茶屋河庄で、

侍の客に呼ばれた遊女小は

るは、侍の親切心にうちとけ、妻子もある恋人・紙屋治兵衛との心中の話と、その約束をほごにする相談をしてしまう。外で話を聞いていた治兵衛は、怒って障子越しに刀を突き刺すが、実はその侍は治兵衛の兄孫右衛門で、弟が入れ込んでいる相手を見届けるために来たのであった。治兵衛は小はるの心変わりを恨み、別れる覚悟がつく。

中之巻（天満屋紙屋治兵衛内）

小はるが請け出されるとのうわさを聞いて、孫右

衛門と、治兵衛の妻おさんの実母（治兵衛のおば）が、紙屋の家を訪れ治兵衛を問い詰める。治兵衛は、それは恋敵の太兵衛の仕業と否定するので、二人は帰る。その後、小はるの裏切りにふとんの下で悔し涙を流す治兵衛の姿に、おさんは小は



るが自分に義理立てし、ひとりで死ぬつもりと悟る。そこで小はるの心変わりには「別れてほしい」と書いた自分の手紙のせいであることを打ち明け、自ら小はるを身請けする金を用意する。そこに、おさんの父五左衛門が現れ、離縁を迫った上彼女を連れ去る。

下之巻（蜷川新地大和屋／名残の橋づくし／網島樋の口） 丑三つ時、兄孫右衛門らが探しに来る中、治兵衛は身を隠し、示しあわせたように小はるを連れ出し、道行に出る。梅田橋から緑橋…蜷橋…そして天満橋…いくつもの橋を渡って、やがて最期の地網島へと二人はたどる。

見どころ 享保五（一七二〇）年の冬、大坂曾根崎新地の遊女小はると紙屋治兵衛が網島で死んだ心中事件を、近松がすぐ筆をとり竹本座で上演した作品です（三日後には早くも舞台にかけられたという話さえ伝わっています）。この作では、各登場人物の個性豊かな人間像を見逃すことはできません。中でも、小はるとおさんの女同士の義理の描き方は、胸に迫るものがあります。人間の純粋な愛情が、世の中の制約によって悲劇へとつながって行く経過をこまやかに表現しており、有名作の多い近松の世話物のなかでも、芸術性の高い最高傑作との評価を得ています。

浄瑠璃・世話物

「女殺油地獄」

◎初演 享保六（一七二二）年七月十五日 竹本座

目の前は油の地獄「諦めて死んで下され」

あらすじ

上之巻

（道行水馴竿〜寢屋川徳庵堤）

天満の油屋河内屋の不良息子

与兵衛は、野崎参りの道中、なじみの遊女をめぐって、はでなけんか騒ぎを起こし、通りかかった高槻藩の侍へ無礼をはたらく。が、その始末を侍のお供をしていた伯父の山本森右衛門につけてもらう。それを見かけた、河内屋の筋向いに店を構える油屋豊島屋の女房お吉は、与兵衛の汚れた衣服を洗ってやるなど世話をやく。

中之巻（河内屋）

与兵衛は、義父徳兵衛が手代上がりで、義理の息子たちに甘い

のをいいことに、今日も野崎参りでの一件を種に、金をだまし取ろうとしたり、妹おかちに芝居をさせ、自分をあと継ぎにしようとしたり画策する。が、それが通じないと見ると、父や妹を足でけったりする。実母おさわは、そんな勝手きままな息子に、勘当を言い渡す。

下之巻（豊島屋しんまちびぜんや〜新町備前屋しんまちびぜんや〜曾根崎新地花屋しんまちびぜんや〜豊

島屋）勘当され借金で首のまわらない与兵衛は、豊島屋を訪れ、お吉に「金を返さないと親に迷惑がかかる」と借金を頼む。が、「夫の留守中には無理」とすげなく

断られた与兵衛は、隠し持っていた脇差を手にお吉に迫る。油まみれで逃げ惑うお吉、追う与兵衛……。このお吉殺しは五月四日の夜のこと。

見どころ

けんか・うそ・家庭内暴力・衝動的殺人・盗み……この作品の主人公与兵衛が次々としでかす事件を、テレビ番組の評論家ならば、「親に甘やかされて育った青年が犯す、場当たりのな犯罪」とコメントするかもしれません。実際それらは、古典の物語と言うより、現代の新聞や週刊誌の三面記事に似ています。そのせいか初演後、長く再演はなく、明治になって坪内逍遙つばうちしやうようや研究者などに注目され、一気に人気作となりました。近年、歌舞伎では、片岡孝夫（現仁左衛門にざえもん）が、ワルながらどこか放つてはおけない繊細な与兵衛像を好演し、当たり役となりました。またテレビドラマや映画の世界では、松田優作や堤真一などが、独自の与兵衛にチャレンジ。三百年近くたった今も、アーティストたちの興味をかき立て続ける近松最大の異色作です。



浄瑠璃・世話物

「心中宵庚申」

◎初演 享保七（一七二二年）四月二十二日 竹本座

「水の中火の中でも先の世まであなたと夫婦に……」

あらすじ

上之巻

（坂部郷左衛門屋敷）

武家の出ながら五歳の時、大坂の八百屋に

養子に行った半兵衛は、亡父の十七年忌の墓まいりのため、実家のある浜松に戻る。ちょうど弟小七郎が仕える坂部家に、殿様のお成りがあるので、居合わせた半兵衛は、機転のきいた料理を作るなど、立派に大役を果たし男を上げる。

中之巻

（上田村島田平右衛門内）半兵衛の妻千世は、

夫の留守中に、姑から家を出され実家に帰っていた。

半兵衛は浜松からの帰りに妻の実家に立ち寄り、千

世が来ていることに驚く。はじめは半兵衛の不義理

を責めていた千世の姉おかると父平右衛門だったが、

やがて「いっしょに行こう。たとえ死んでも体も戻



さない。未来まで夫婦」と家に帰っていく二人を、水盃をかわして見送る。

下之巻（八百屋伊右衛門内〜八百屋半兵衛女房お千世道行〜生玉大仏勸進所）

八百屋にひとり戻った半兵衛は、姑に「今のままでは、姑に悪名をきせることになる。一度千世を家に入れてから、自分で離縁する」といい、納得させる。半兵衛は家に戻った千世に事情を伝え、姑の目の前で再度家から出す。その後、家人の目を盗み、家を抜け出した半兵衛は、千世と手をとって最期の道行に出る。

見どころ

最晩年、七十歳の近松が書き上げた、最後の世話浄瑠璃です。享保七年、大坂で実際にあった夫婦心中を題材にしました。離縁しないと約束した義父への義理と、養い親（姑）への孝との板ばさみから、死を選ぶほかなかった二人の悲劇が胸を打ちます。その姑は敵役とはいえ、寺参りに熱中している夫の代わりに、一家の切り盛りをするなど、男勝りの働き者としても描かれています。なぜ彼女がお千世を嫌うのか、作者はその理由を書いていませんが、そのことがかえって話を単純化することなく、逆に姑の人物像に現実味を与えているとも言えるでしょう。中之巻「上田村」の場面は、娘に対する、老いた父親の切々たる感情が見事に描かれており、見る者の心をつつ場面です。

イラストストーリー
「けいせい仏の原」
ほとけ はら

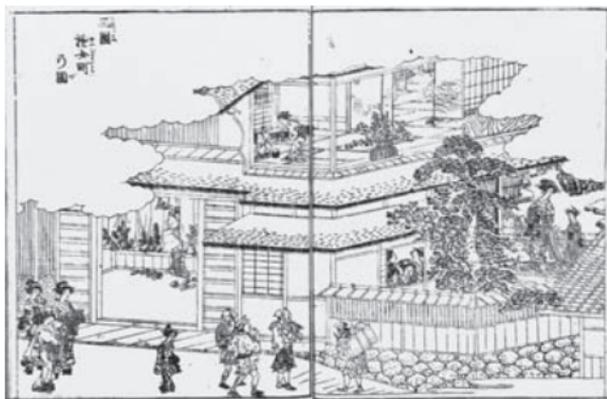
『けいせい仏の原』は、越前三国の遊廓を舞台にしたお家騒動物で、近松の書いた歌舞伎作品の中でも最高傑作のひとつです。

ストーリーを、絵物語にしました。

● 第一（北国街道筋く梅永刑部館門前くさる大名の下屋敷）

越前・三国の遊廓玉屋の傾城（遊女）

今川は、越前の国主梅永刑部の息子文蔵を愛し、二人のあいだに子ども藤松までも



三国遊女町の図（『二十四輩順拝図会より』）

うけていました。今川の父乾介太夫は、北国街道で偶然娘と再会し、「ある大名家に召し抱えられたので、今にそなたを身請けする」と約束をします。

鷹狩から帰った文蔵は、文蔵の許婚竹姫の家に成りすました介太夫から、文蔵の弟帯刀たてわきに、米二千石の借りがあるといわれます。しかもこの二千石は、文蔵の遊廓で使った費用だということです。このため文蔵は、父刑部から「阿呆払い」（勘当）にされます。ところが、実は帯刀が兄を追い払うために、介太夫を使って仕組んだことでした。



追い出された文蔵は、「紙衣かみこ」という粗末な紙の着物姿で、三国の月窓寺げつそうじへ向かいますが、ある大名屋敷の前まで来ると、昔好きだった遊女奥州おうれうが作った歌を耳にします。思わず屋敷に忍び込んだ文蔵は、二人の遊女——奥州と今川にまつわる遊郭での大騒動や、遊びが過ぎて落



ちぶれたいきさつを、おもしろおかしく
腰元たちに聞かせます。この長い身の上
話のあいだ、座敷の暗がりで、涙ながら
に話を聞いていた奥州が姿を見せ、文蔵
と酒を酌み交わします。そこへ文蔵の許
婚である竹姫がやってきて、嫉妬心から、
魂が火の玉となって舞い上がり、奥州に
乗り移ったとみるや、その身体を借りて、
文蔵に激しくうらみごとを訴えます。



帯刀と介太夫も、文蔵を追ってきて切りあいになり、奥州の機転で、文蔵は難を逃れますが、介太夫らは国主刑部をその場に連れ込み殺してしまいます。駆けつけた家老の望月八郎左衛門は、竹姫らを助け落ちのびます。

●第二（三国揚屋柏屋内く介太夫屋敷内）

虚無僧姿の文蔵は、三国の揚屋柏屋で、今川と再会します。今川が遊女として売られたときの年季手形に、「乾介太夫」の名が書かれてあったことから、父を惨殺した敵が、今川の実父介太夫であることを知った文蔵。一同にこのなりゆきを話し、「今川にはひまをや





った。自分が親の敵介太夫を討てば、うれしくなろう」と、今川に息子の藤松を預け、月窓寺を頼っていくように言いおいて、泣く泣く別れます。

介太夫の住居に、何者かが「火付けをする」と書いた札を張ります。夜になり、介太夫が見張りをしていると、そこに今川と藤松が訪れます。今川は、父が文蔵に討たれないように、火の札で父を逃がそうとしていたのです。しかし、暗闇のため、それとは知らず藤松に切りつける介太夫。そこへ、文蔵と八郎左衛門が現れ、切り合いになります。今川が両者のあいだに入って、介太夫に、恋人が文蔵であることを話すと、介太夫は驚き、これまでの悪事の数々をわび、その場に姿を見せた帯刀をだまして討ち取らせます。

その上で、文蔵に親の敵として討たれようとする介太夫を、文蔵は刀で切りつけ「サア敵は討った」と叫びます。が、それは峰打ちでした。

一同は、文蔵の機転に喜びの声をあげます。

●第三（月窓寺如来東山開帳の場）

月窓寺の住職は都に上り、寺の宝物である沓くつはきの阿弥陀如来あみだにょらいを、東山長楽寺ひがしやまちょうらくじで公開します。竹姫、奥州、今川が供養の音楽を奏でると、大勢の人が参拝に訪れ、めでたく治まった世を祝うのです。



歌舞伎

「けいせい仙の原」

◎初演 元禄十二（二六九九）年一月二十四日 京都四条大芝居

見どころ

元禄時代の三国は、北前船の寄港地として、多くの船人でにぎわっていました。このため

遊廓などの遊び場も栄えていました。この作品は、その三国の遊廓を主な舞台として書かれた歌舞伎

です。初演当時、主役の文蔵に扮した名優坂田藤十郎が、長々と身の上話をする場面が有名でした

（第二「さる大名の下屋敷」）。良家の跡取り息子が、遊女に心を奪われ、家を追われて落ちぶれます。

この後、遊女のところで長々とおしゃべりをするという話の展開を「やつし」と呼びます。このやつ

しの芸が、当時の上方歌舞伎の典型的

な筋書きでした。近松座を主宰する人間

国宝の歌舞伎役者・中村鴈治郎氏が、一

九八七年、この作品を復活上演しまし

た。藤十郎が得意にした、このやつしの

見せ場を、見事に現代によみがえらせま

した。



浄瑠璃・時代物

「出世景清」

◎初演 貞享二（一六八五）年 竹本座

「平景清と源頼朝、両雄の対決の果てに」

あらすじ

平家滅亡後、平景清は、源頼朝を討って一族の恨みを晴らす機会をねらっていたが、その前に頼朝の臣で、知略にすぐれた重忠を討つ計略だった（初段）。

熱田大神宮の大宮司は、景清に娘の小野姫を嫁がせ、協力を約束する。清水寺の観世音を信仰する景清はまた、京都清水坂の遊女阿古屋とのあいだに、二人の子どもをもうけていた。阿古屋の兄、伊庭十蔵は景清を捕らえ、恩賞を得ようと妹をそののかす。阿古屋は景清にあてた小野姫の手紙に逆上し、景清のいるところを訴える。景清は危うく難を逃れる（二段）。

重忠は、景清をおびきよせるために、熱田の大宮司や小野姫を捕らえ、六条河原で苦しい目にあわせる。景清は名乗り出て、縄にかかる（三段）。



二人の子どもを連れ戻した阿古屋は、景清のもとへわびに来るが、許してもらえない。このため、阿古屋は景清の面前で、子どもとともに自害する。それを見た景清は牢を破り、通りかかった伊庭十蔵を殺し、再び牢に戻る（四段）。

景清は、佐々木四郎の手で首をはねられるが、そのさらし首は、清水の千手観音の首と変わっていた。頼朝はその仏頭を袖に受け、清水寺に参詣する。頼朝は千手観音に救われた景清を許し、宮崎の庄を与える。

景清は、頼朝をねらい続けたことを恥じ、両眼をえぐり、九州日向に下る（五段）。

見どころ

近松が竹本義太夫のために書き下ろした最初の作品です。義太夫の前途を祝って、題に

「出世」という文字を用いたのかもしれませんが。主人公の景清は、『平家物語』にも登場する実在の人物です。彼が平家復興を願い、頼朝を執念深く追う物語は、後に謡曲や幸若舞、あるいは古い時代の浄瑠璃などに語り継がれてきました。この作品では、近松は先行の作に筋を借りながら、阿古屋、小野姫など、景清をめぐる女性たちの心理を深く追求するなど、これを「史劇」と呼ぶにふさわしい内容までに高めています。そのことから、演劇史の上では、『出世景清』以前の浄瑠璃を「古浄瑠璃」、以後を「当流浄瑠璃」と呼んでいます。



浄瑠璃・時代物 「けいせい反魂香」

◎初演 宝永五（一七〇八）年 竹本座

「しつかりものの女房はいかにして亭主を助けるか」

あらすじ

絵師狩野元信は敦賀に下り、遊女遠山（実は絵師土佐将監光信の娘）

と出会い、夫婦の約束をする。元信は、近江国の六角家に仕えるが、姫君銀杏の前

と祝言をあげるはめとなる。それを見た悪臣不破伴左衛門らが難癖をつけ、元信を

捕らえる。元信は自分の肩をかねで、血を襖戸に吹きかけ、虎を描く。この虎は生

きて暴れだし、元信を助け出す。虎は京都山科に蟄居している土佐将監

光信の住まいの辺りに現れるが、土佐の名字が許された光信の弟子修理介

は、筆でその虎をかき消す。修理介の兄弟子、浮世又平も、光信から土佐

の名乗りを許してもらおうと、妻と師匠光信を訪ねる毎日だが、ものを言

うのが不自由なこともあり、光信はそれを許さない。絶望した又平は、庭

の手水鉢に自分の姿を書き残して自害しようとするが、手水鉢の裏側に

その絵が浮き出る。その功により名を許され、土佐又平光起と名乗る(上之巻)。

京六条の廓で、六角家の名古屋山三は、元信のため伴左衛門を討つ。廓に現れた元信は、みやと名を変えた遠山と再会するが、「山三への義理のため、銀杏の前の結婚を断れない」と言う。元信を思い切れないみやは、銀杏の前に頼み、元信としばしの間、夫婦となる。が、それは不思議な香の力によって現れたみやの亡霊だった。みやは元信に別れを告げ、消え入る(中之巻)。

出世した元信は、光信に蟄居が解かれたことを知らせに来る。銀杏の前に遠山の姿をさせ、将監光信の娘として元信に嫁がせる(下之巻)。

見どころ 題名に採られた「反魂香」とは、死者の魂を呼び返し、その姿が煙の中に現れるという中国の故事に出てくるお香のことです。死んだ後も、元信を思うみやのひたむきな愛情が、この作の最大のテーマです。現行の上演では、元信もみやも出てこない上之巻の「土佐将監閑居の場」のみが演じられますが、近松の人気作の一つです。後輩に先を越され死まで覚悟する又平の悲哀と、幕切れのどんでん返しですが、一幕の舞台として魅力的だからでしょう。とりわけ、おしゃべりで夫を助けるしつかりものの妻が示す深い情愛が、観客の胸を打ちます。



浄瑠璃・時代物

「**嬬山姥**」

◎初演 正徳二（一七一二）年九月以前 竹本座

「八重桐と鬼女に変えた出来事とは…」

あらすじ

平安時代のこと。武将源頼光は、名剣を求めて、渡辺綱を連れ、小夜の中

山に泊まる。坂田忠時の娘系萩は、宿屋の料理人喜之介の助太刀を得て、父の敵を

討つ。敵を討ったその太刀を頼光に献上した手柄で、喜之介は頼光に召し抱えられ、

碓氷定光と名乗る（初段）。

頼光は、権勢を誇る右大将清原高藤の企みで、行方知れずの身。岩倉

大納言兼冬の館では、頼光の許婚沢潟姫の心を慰めるため、煙草売りの

源七を呼び入れ、小唄を歌わせる。そこに親の敵を討つため、家を出た夫

坂田時行の行方を訪ね歩く遊女八重桐が通りかかり、夫に似た歌声を聞

く。館に入ると、果たして源七、つまり時行だった。館の局たちに問われる

まま、八重桐は廓での騒動話や、帰らない夫へのあてこすりを面白おかしく

語る。「離別は敵討ちのため」と怒った時行に、八重桐は、「敵はそなたの妹系萩が先月討った」と責める。時行は恥じて、その場で切腹。その無念の思いが、八重桐の胎内に宿る。鬼女となった八重桐は、押し寄せた高藤方の侍達を追い散らす(二段)。

縁のある、美濃国の能勢判官にかくまわれていた頼光を狙う高藤。判官の養子で、頼光の異母弟冠者丸が、頼光の身代わりとなり討たれる。山中に逃れた頼光は、山を巡っているうちに、山姥となった八重桐と出会う。八重桐が時行の魂を身ごもって産んだ怪童丸は、頼光の家来となり坂田金時と名づけられる。ここに綱・定光・卜部末竹・金時の四天王が揃い、悪鬼を討つため、近江の国高懸山へ向かう。鬼の大將をねじ伏せた四天王は、都に入り高藤を捕らえ、国はめでたく治まる(三〜五段)。

見どころ 今日では「廓話」として、主に二段目のみが演じられます。女性は口数が少ないのが一般的であった時代に、長ぜりふをしゃべらせた点がおもしろく、これは、歌舞伎で坂田藤十郎が得意とした見せ場を取り入れたものです。実際、八重桐の名は、藤十郎の影響を受けた女形荻野八重桐の名を、そのまま借りたものです。人形浄瑠璃と歌舞伎との相互の影響・交流を考える点でも、興味深い作品です。

浄瑠璃・時代物

「**国性爺合戦**」

◎初演 正徳五(一七一五)年十一月十五日 竹本座

「近松最大のヒット作は異国情緒たっぷり」

あらすじ

舞台は中国の明。思宋烈皇帝の時代で、栄華を誇っていたが、李蹈天の計略で韃靼兵(蒙古軍)に攻撃される。皇帝は殺され、落城した(初段)。

かつて皇帝の怒りを受け、日本の平戸に渡っていた鄭芝龍は、老一官と名乗り、日本人の妻との間に、和藤内という子どもをもうけていた。和藤内は祖国の危機を知り、明国を復活させようと、父母と三人で大陸に渡る。和藤内らは、一官が昔、

この地に残した娘で、今は甘輝という武将の妻になっている。錦祥女を訪ね、甘輝を味方にするため、居城の獅子が城へと向かう。その途中、母と和藤内は、千里が竹に迷い込み、ここで猛虎と戦う。日本から持参した伊勢神宮のお札で、激しく抵抗していた猛虎を従わせ、敵も驚く活躍をする(二段)。



和藤内らは獅子が城に着くが、甘輝はすでに韃靼軍の將軍に任じられていて、「女（妻）にほだされ、和藤内の味方になったと言われては、末代までの恥辱」と断る。しかし、妻錦祥女と母の覚悟の自害により、勇猛な甘輝を味方につけることができ、甘輝は和藤内を、国性爺鄭成功と名乗らせる（三段）。

国性爺と韃靼兵との戦いは五年が過ぎる。やがて南京城で、決戦の時を迎えた。国性爺の活躍で李蹈天を討ち果たし、ついに勝利を得る（四段・五段）。

見どころ 題材は父が明の人、母が日本人という、明代末に活躍した鄭成功の英雄伝です。日本と中国にわたるスケールの大きな物語で、初演から三年越し、十七カ月の長期公演を記録しました。近世末までに、人形浄瑠璃だけでもおよそ三十回繰り返し上演され、その回数は、近松作品のなかでも断然トップです。歌舞伎や小説にもなるなど、「国性爺ブーム」がおこったほどです。二段目「千里が竹」は、「荒事」と呼ばれる勇壮な演技の中に、「おかしみ」の感じられる場面です。何といっても、三段目「獅子が城」の段が見せ場。特に和藤内の母と腹違いの姉の命をかけた動きにより、劇的な転換が行われる場面が圧巻です。からくりも多用され、華のある作品です。なお「国性爺」というのは、国王の姓を賜った人物の敬称です。

浄瑠璃・時代物

「平家女護島」

◎初演 享保四（二七一九）年八月十二日 竹本座

「俊寛悲劇の見事な展開」

あらすじ

平家討伐の秘密会議に参加した俊寛僧都・平康頼・少将成経の三人は、捕らえられ、九州南端の小島鬼界ヶ島へ流罪になる。俊寛の妻東屋も捕らえられる。平清盛は東屋に引かれ、側室にしようとする。京六条河原では、大仏が獄門にかけられ



たが、大仏の首から文覚が現れ、源氏の大将であった源義朝の白骨を奪って立ち去る（初段）。

成経は、隣の桐島の海女千鳥と恋におち、俊寛を親がわりに婚礼をあげる。島に大船（赦免船）が来て、使者瀬尾太郎は、康頼・成経の赦免を告げる。一人残る俊寛

は泣き悲しむが、平重盛らの意を受けたもう一人の使者が、俊寛を本州まで連れ戻すと伝える。一方、瀬尾は千鳥の同行を許さない。俊寛は、成経と千鳥をあわれみ、そ

の上愛妻東屋の死を告げられ、帰国の望みを絶つ。そして瀬尾を切り殺し、その罪を一身に背負い、一人島に残る決意をする。俊寛は、千鳥を自分のかわりに船に寄せ、遠ざかる船を、岩上で、いつまでも見送る（二段）。

一方、国内では、腰元笛竹ふえたけと姿を変えた牛若うしわかが、源氏再興をめざしていた。備後の敷浜についた千鳥は、法皇を救う。このため平清盛に踏み殺されるが、死骸から出た猛火に、清盛は恐れおののく。清盛は熱病に苦しみ、東屋と千鳥の亡霊に悩まされ、ついにもだえ死ぬ。平家追討の命を受けた文覚は、源頼朝が挙兵する夢を見る（三段・四段・五段）。

見どころ

『平家物語』を題材にした作品。平家の滅亡から源氏興隆まで、虚実とりまぜて描かれています。二段目「鬼界ヶ島」は、『平家物語』や能でも取り上げられ、「足摺あしずり」の名で有名。『平家女護島』では、それらをふまえながらも島の娘千鳥を登場させるなど、新趣向を加えています。一度は許された俊寛が、新しい罪により自主的に残るといふ展開から、独特の俊寛像が生まれました。とはいえ、友を乗せた船が、いよいよ島を離れていくときの俊寛の悲しみは、想像を絶するものがあり、極限状況に置かれた人間の悲劇が、多くの感動を呼びます。現在でも上演の多い時代物であり、海外公演でも好評を得ています。

「近松の名作あれこれ」 機会があればぜひ見たい作品紹介

『丹波与作待夜のこむろぶし』は、生き別れた親子の再会場面が、『恋女房染分手綱』という作品の十段目「重の井子別れ」に改作され有名です。

『堀川波鼓』『大経師昔暦』『鍵の権三重帷子』は、俗に三大姦通劇と呼ばれます。近松はこれらの不倫を決して興味本位で描いておらず、偶然の重なりにより、主人公たちが追い詰められていく過程を冷静に見つめています。

歌舞伎では、平成十年、近松座によって二百九十六年ぶりに復活上演された『けいせい壬生大念仏』が傑作とされています。遊女におぼれて落ちぶれた若殿の「やつし」、一人芝居による長ぜりふなど、元禄時代の上方歌舞伎の集大成ともいえる超大作です。

第一 章

文楽を楽しく見るために

人形浄瑠璃(文楽)の歴史

文楽は、わが国における伝統演劇の一つです。世界でも珍しい人形劇といってもよいでしょう。「文楽」という呼称は、幕末期に活躍した人形浄瑠璃芝居の経営者・植村文楽軒うえむらぶんらくけんにあります。この人形芝居の劇場が「文楽座」と呼ばれ、いつの間にか芸能そのものを指すようになったのです。

文楽は、物語に節をつけて語る「浄瑠璃じょうるり」、それを演奏する「三味線しゃみせん」、それらにあわせて操られる「人形」の、三つから成っています。

1 義太夫(ぎだゆう)節のはじまり 語り物の発達

浄瑠璃はだいたい室町時代の中期(15世紀末)から始まりましたが、江戸中期(17世紀後半)に、竹本義太夫が現れ、義太夫節をおこしました。これが人気を集め、これ以後は浄瑠璃といえば義太夫節を意味するようになりました。



2 近松門左衛門の登場

近松門左衛門が登場するまでは、浄瑠璃の内容は古めかしい縁起物や武勇伝でしたが、彼はそれらを人物の心の動きをも描写する優れた劇文学まで高め、元禄16年（一七〇三）の『曾根崎心中』で、初めて「世話物」のジャンルを、浄瑠璃で確立しました。

3 竹・豊（ちくほう）時代 文楽の黄金時代

竹本義太夫がおこした竹本座のほかに、義太夫の弟子の豊竹若太夫が豊竹座を始めました。竹本座は、人物の心理描写を重んずる地味で重厚な芸風、豊竹座は、はでで技巧的な芸風と、それぞれが人気を呼び、それぞれの頭文字をとって「竹豊時代」とよばれる文楽の黄金時代がありました。



4 人形の歴史 三人遣いの完成

竹本義太夫が竹本座をおこしたころは、まだ人形も小さい一人遣いの形でしたが、次第に改良が加えられ、やがて三人で一体の人形を操る三人遣いになりました。人形の大きさも、現在の人形に近い大きさになりました。

人形浄瑠璃の舞台も、三人遣いの完成とともに、ほぼ現在の形式に固定したと思われる。

舞台の構成

人間の演じる芝居と違って、太夫、三味線弾き、人形遣いの三者が、役割を分担して作品を上演します。したがって文楽は、独特の舞台構造をもっています。

舞台は客席から見て、右側に床があり、ここに義太夫を語る太夫と三味線が座ります。

床は回転式となっていて、「文楽回し」と呼びます。一つの場を語り終えると、文楽回しが回って、担当した太夫・三味線弾



きが消えます。裏側から次の場を語る太夫・三味線が現れるのです。

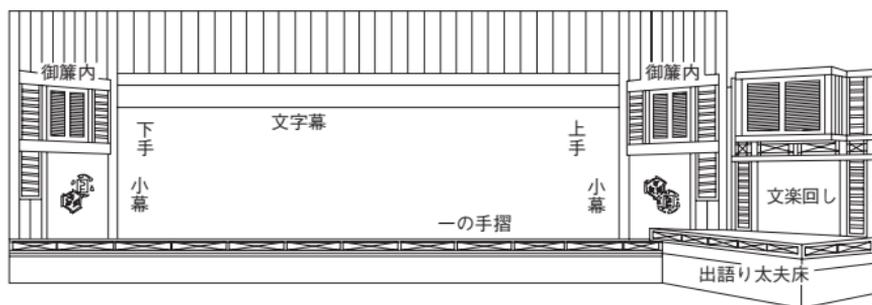
舞台は本手と呼ばれる通常の高さの後面と、舟底と呼ばれる一段低くなっている前面とに分かれています。本手に屋体が組まれ、演技は屋体の中と外で行われます。

さらに、人形遣いの持った人形の足が宙に浮いて見えないように、横一面にさえぎる板「手摺」が、本手と舟底の前部分に作られています。

人形が遣い手と一緒に屋体から舟底へ降りるときは、本手の前の手摺を横に引いて出入り口にします。この装置を「オトシ」と呼びます。

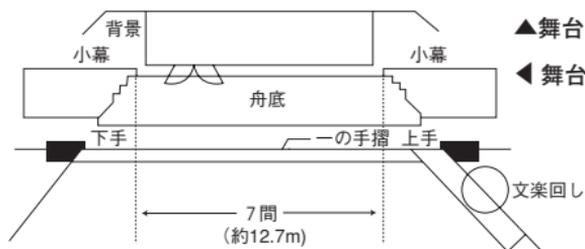


▲国立文楽劇場



▲舞台略図(国立文楽劇場)

◀舞台平面略図



人形

人形の衣装は、主遣いが役を考えながら着せる。人形の大きさは、
丈 120cm～150cm
重さ 5kg～10kg

三人が一心同体となって、一体の人形を遣います。この結果、木と布で作られた人形が、まるで人間のようにみえてきます。



【三人遣い】

「足10年、左15年」人形遣いの修行は足から始まり、左遣い、主遣いへと進みます。

【主遣い】

胴体の後ろから左手をさしこみ、人形のかしらを動かし、右手で人形の右手を動かします。

人形のかしらで微妙なサインを出し、左遣いと足遣いに次の動きを伝えます。

【足遣い】

両手で人形の両足を操作し、足拍子を踏んで動きにアクセントをつけます。

【左遣い】

人形の左手を動かし、道具の出し入れを行います。

【舞台下駄】

足遣いとの高さのバランスをとるために、主遣いが履く特別な下駄。

【黒衣】

無を表す、黒色の衣装。

人間をかくして人形をきわだたせませます。



太夫

登場人物のせりふのほか、心理・情景・事件の背景をすべて一人で語り分けます。

腹式呼吸を助けるヒミツ道具

腹帯（はらおび）
約7cm幅の帯。
下腹部をしめる。



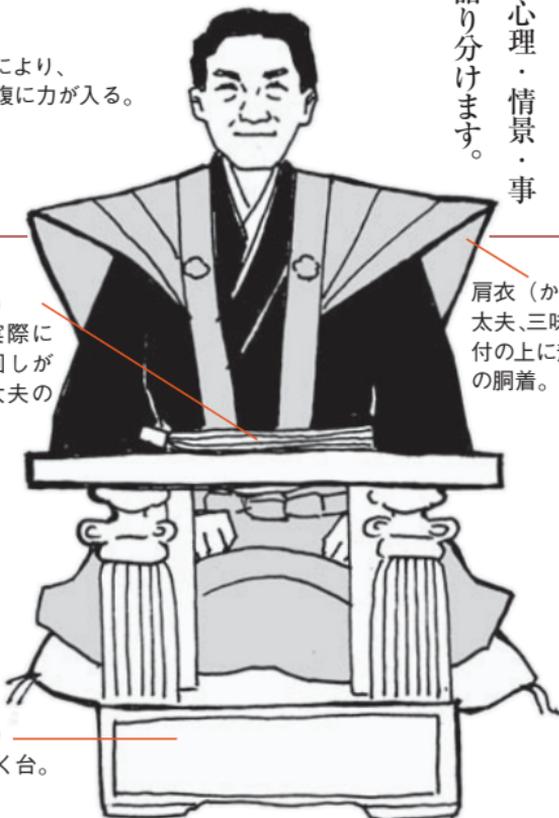
オトシ

砂・小豆を入れた小袋。
身体のバランスをとるため、
懐に入れる。



尻（しり）ひき

これを敷くことにより、
かかたが立ち、腹に力が入る。



床本（ゆかほん）

太夫が舞台上で実際に
語る文章と節回しが
書かれた本。太夫の
自筆。

肩衣（かたぎぬ）

太夫、三味線弾きが着
付の上に着ける袖なし
の胴着。

見台（けんたい）

太夫が床本をおく台。

三味線

太夫と対等の立場で、バチ先ひとつで、登場人物のさまざまな性格やその場の情景を表現します。

太棹三味線

(ふとざおしやみせん)

絃は3本。

棹が太く、音も大きい。

棹は絃のあたる「ツボ」の所がへこむため、時々カンナをかける。

糸道(いとみち)

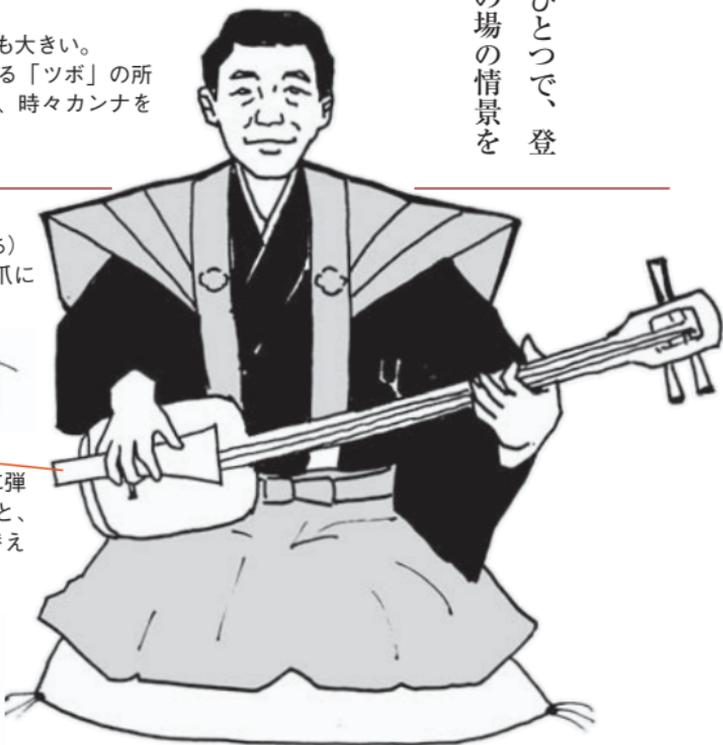
絃を押さえる爪にできる溝。



撥(ばち)

たたきつけるように弾くため、すりへると、「ミミ」だけ取り替える。象牙製。

ミミ



首(かしら)いろいろ

人形浄瑠璃の人形は、美しく精巧せいこうにできています。特に、かしら(顔の部分)は、年齢や役がらを表す大切な働きをします。かつらや衣装をかえることによって、いろいろな役に使いわけられます。



【娘(むすめ)】

14,15歳からの未婚の女性や若女房。

美しく可憐かれんなかしら。

『冥途の飛脚』梅川

『曾根崎心中』お初

『心中宵庚申』お千世



【老女形(ふけおやま)】

20代から40代の中年の女性。

『心中天の網鳥』おさん



【傾城(けいせい)】

もっとも華麗かれいなかしら。

最高の位の遊女としての教養をそなえ、色気と意気地をもつ。

『壇浦兜軍記』阿古屋

『ひらがな盛衰記』梅ヶ枝



【源太(げんた)】

20歳前後の色気ある二枚目。

『仮名手本 忠 臣蔵』若狭之助

『冥途の飛脚』忠兵衛

『曾根崎心中』徳兵衛



【文七(ぶんしち)】

線の太い男性的な顔立ちで、じっと耐える悲劇の主人公にふさわしい。

『菅原伝授手習鑑』松王丸

『絵本太功記』光秀



【又平(またへい)】

素朴で正直一途な役に使われる。

『傾城反魂香』又平



【陀羅助(だらすけ)】

下品で嫌味な敵役に使われる。

『冥途の飛脚』八右衛門

『心中天の網島』太兵衛

文楽豆知識

【足拍子】あしびょうし

人形で、登場人物が走ったり歩いたりするさまを表現したり、何かの型をするとき、決まりの形を強調するために踏む拍子のこと。足遣いの担当。

【掛け合い】かけあい

義太夫節では、原則として一人の太夫が、一段すべてを語るが、掛け合いは、人形の役にあわせて数人の太夫で演奏する方式。

【切り場】きりば

一段の浄瑠璃のうちクライマックスの部分。各段の最後にあり、その段の中核に当たる重要場面。単に切りとも。

【切り場語り】きりばがたり

切り場を語る技量のある者で、番付の名前の上に、「切」の字を許された太夫。同じ切り場を語っても、「切」の字を許されていない太夫は「奥」「後」などと書かれる。

【景事】けいじ

舞踊劇や、心中物の道行など、舞踊の要素のつよいものをいう。「けいじ」ともいう。

【口上】こうじょう

場面のvari目ごとに、そこを語る太夫と三味線弾きの紹介を行う。これは人形遣いの役目。黒衣に身を包んだまま舞台上手に現れ、独特の節まわしで、太夫と三味線弾きの名前を告げ、人形の出遣いや早代わりがあるときは、それも併せて観客に知らせる。

【サワリ】

義太夫節以外の他流の曲節を流用する(障る)節。転じて一段中のもっとも重要な聞かせどころ、とくに女性の心情を吐露した場面などをさす。「くどき」ともいう。

【素浄瑠璃】すじょうるり

人形をいれず、太夫と三味線だけの演奏をさす。

【時代物】じだいもの

浄瑠璃全体の時代設定が、江戸時代より古く、原則として公家や武士の社会での出来事を扱った作品のこと。

【世話物】せわもの

江戸時代の町人の生活や風俗を背景に、庶民の事件、恋、人情のもつれ・争いを描いた作品のこと。

【大団円】だいだんえん

五段組織で出来ている時代物の最終五段目で、通常は、ほとんど上演されることがない。

【チャリ場】

文楽の演目の中で、観客の笑いを誘うような滑稽な場面をさす。

【ツメ人形】

捕り手、家来、通行人、腰元、官女など、その他大勢の役に使われる一人遣いの人形。番付では遣い手の名を記さずに、「大ぜい」と書かれる。

【出遣い】でづかい

文楽では一体の人形を三人で操るが、そのうちの一つ中心となる主遣いが、頭巾をかぶらず、顔を出して舞台へ登場するやり方。現在では、原則的に切り場はほとんど出遣いであり、主遣いの衣装は紋付と袴になる。

【通し狂言】

時代物を発端から大詰めまで、若干のカットはやむを得ないとしても、通して上演すること。

【端場】はば

浄瑠璃の各段のはじめの部分。戯曲の導入部をいう。切り場で展開されるドラマの仕込みの段階で、事件の背景や登場人物などを、概略的に紹介する。番付の名前の上に、口、中、次と書かれる。

【番付】ばんづけ

上演する外題、出演者、配役などが書かれた印刷物。文字の大小、書かれる場所により、出演者の格や地位などが示される。

【道行】みちゆき

人形浄瑠璃の重要な見せ場の一つ。登場人物が目的地へたどり着くまでの行程を見せる場面で、通常は複数の太夫と三味線弾きで花やかに演奏される。

【床】ゆか

文楽で義太夫節を演奏するための、客席右手前方に張り出した舞台。回転式の盆の上に乗って太夫、三味線弾きが登場し、口上の後、演奏をはじめめる。

「文楽に行こう！」 文楽観劇ガイド

文楽のホームグラウンドは、国立文楽劇場です。昭和五十九年に、大阪・日本橋に文楽や歌舞伎などの上方芸能の殿堂としてオープンしました。現在のところ、一、四、六、七、八、十一月に自主公演が行われています。このうち六月は、鑑賞教室（一部、若手公演）に充てられており、太夫・三味線・人形遣いのぎせいいん技芸員が、実演を交えてわかりやすく解説しています。

昭和四十一年に開場した東京・千代田区隼町の国立劇場小劇場でも、文楽公演が行われています（歌舞伎は隣の大劇場で上演）。こちらの自主公演は、二、五、九、十二月の各月で、このうち十二月は鑑賞教室と若手公演になっています。



【公演内容・チケットの問合先】

- 国立文楽劇場(大阪)
電話06-6212-2531(代)
- 国立劇場小劇場(東京)
電話03-3220-3000

第二章
歌舞伎と近松

歌舞伎の歴史

1 歌舞伎の発祥

江戸初期の慶長八（一六〇三）年、京都に、出雲大社の巫女といわれる阿国が現れ、念仏踊りを踊って評判となり、出雲の阿国の名前が広まりました。やがて阿国は、派手な男装をして遊女のところへ通う「かぶき踊り」を始めました。これが「阿国かぶき」です。これが歌舞伎の誕生です。

2 女（遊女）歌舞伎、若衆歌舞伎から野郎歌舞伎へ

阿国かぶきは遊女たちに広がり、女（遊女）歌舞伎は人気を集めました。が、風紀上のトラブルから禁止され、代わって美少年たちの若衆歌舞伎が脚光を浴びます。これも風紀問題で禁止となり、後、前髪を剃り落とした男性だけの野郎歌舞伎が上演されるようになります。承応二（一六五三）年のことです。これが現在の歌舞伎の原点となったものです。

3―元禄歌舞伎から宝暦・天明の歌舞伎へ

江戸で市川団十郎の荒事、京都で坂田藤十郎の和事が創始され、江戸と上方の芸風の違いは明治まで続いていきます。近松門左衛門が大坂・竹本座の座付作者となつてから、上方を中心に人形浄瑠璃が栄え、一時、歌舞伎は低迷しますが、江戸中期の宝暦ごろには、歌舞伎独特の機構として回り舞台が考案され、やがて江戸歌舞伎の全盛期が到来します。

4―文化・文政、幕末の歌舞伎から近代・現代へ

作者の鶴屋南北と河竹黙阿弥が出た時代。南北は世間をリアルに描く生世話狂言を確立し、黙阿弥は幕末世相を反映した白浪物という泥棒の世界を多く描いています。明治に入ると、役者の地位向上が図られ、また狂言作者以外の作家による「新歌舞伎」も盛んになります。第二次世界大戦後には「新作歌舞伎」、現代は市川猿之助の「スーパー歌舞伎」も登場しています。

近松の歌舞伎

園田学園女子大学 近松研究所

近松門左衛門は浄瑠璃ばかりでなく、歌舞伎の作品も残しています。近松は、四代の約十年間（正確には数え年で四十一歳から五十三歳、元禄六八一六九三〇年〜宝永二八一七〇五〇年）を、京都で主に歌舞伎の作者として過ごしました。歌舞伎作品のことを当時「狂言」と言いましたので、歌舞伎作者は「狂言作者」と呼ばれています。

近松は、約十年間で、五十作近い狂言を書いたのではないかと考えられます。当時の歌舞伎は、絵入り筋書本すじがきとして出版された「絵入狂言本えいりきげんほん」によって内容を知ることができるのですが、これも、狂言作者の関与の状況が明らかでなく、近松の文章がどれほど反映されているのかわかりません。そこが、同じく近松作とある浄瑠璃本とは異なるところです。それでも、絵入狂言本は彼の歌舞伎を知るための貴重な手がかりであり、署名などによって近松作と判断できるものは、元禄六年（一六九三）の『仏ぶつ

母摩耶山開帳』をはじめ、岩波書店刊『近松全集』では二十九作が確認されています（巻末・近松作品目録参照）。そのうち、元禄十二（一六九九）年の『けいせい仏の原』、同十五（一七〇二）年の『けいせい壬生大念仏』は、大当たりをとって続編も作られたことなどから、近松の歌舞伎の代表作と考えられています。

当時、上方の歌舞伎では、大名家の跡継ぎ争いを発端とするお家騒動狂言が中心でした。右に挙げた三作もお家騒動狂言です。これは、たくさん的人物を登場させ、活躍させるのに適した枠組みであり、作者には、役者の見せ場を作ること、もっと言えば、その役者が得意とする芸や演技を生かしてはめ込むことが求められました。

この本の28ページで紹介している『けいせい仏の原』を例にとるならば、若殿梅永文蔵役の坂田藤十郎には、やつし事の見せ場がたっぷりと用意されています。高貴な人物がさまざまな事情により、町人や職人などに身を落とした姿——やつした姿で見せる演技をやつし事と言います。藤十郎は、紙衣（和紙で作られた着物）姿で流浪しながらも、国元を追われる原因となった遊女との恋愛模様を、座ったまま手振りよろしく長々と話すという演技で大好評を得ました。この部分のせりふは、絵入狂言

本にかなり詳しく書かれています。まず、男女間の愛情が明るくしかも細やかに説かれ、次いで遊女同士の意地の張り合い、文蔵も巻き込んだ言い争いから廊中が大騒動になるまでがテンポよく展開し、最後に誤解から別れてしまった悲しみと、勘当されおちぶれても変わらない遊女への愛情が、しみじみと語られます。そこからうかがえる、登場人物の人間像に真実味を与え、生き生きと見せる演技には、自分の見せ場だからと言うのではなく、「人間の真実を写すことがもつとも大切」(『賢外集』)と考えた藤十郎の工夫はもちろんのこと、作者近松の人間へのまなざしも感じられるようです。

藤十郎はまた、「狂言こそが重要で、それがよければ自分の見せ場が少なくても構わない」(『耳塵集』)と言って、作者を重用したため、近松との提携を導くことになったのでしょう。近松の歌舞伎二十九作のうち二十作が、藤十郎出演の一座によつて上演されています。

近年発見された『金子日記』(藤十郎とも同座した道外役者兼狂言作者で、右の芸談『耳塵集』を書き留めた金子吉左衛門の日記)には、近松ら作者の新作原案

が、主演役者との相談によって練り上げられ、改変されながらも演技として具体化していく、「仕組み」の様子が記録されています。狂言本として読むことができるのは、こうして作者と役者が一緒に作り上げた内容なのです。いわば、狂言作者というのは、上演に至るまで、役者などのさまざまな要求に応えて、作品を書き替えていく骨の折れる仕事とも言えるのですが、坂田藤十郎という「狂言」の理解者を得たことが、近松を長く歌舞伎の世界に引きとめたのではないかと思われれます。

当時上演された歌舞伎は、一日のうち、お家騒動狂言を主演目として、その後、心中や殺人などの事件をとり上げた世話狂言を付けるのが一般的でした。近松は世話狂言にも関わったわけです。このような上演形態や、役者を生かしつつ狂言に命を与えるという歌舞伎製作の経験が存分にそそぎこまれて、元禄十六（一七〇三）年、近松最初の世話浄瑠璃『曾根崎心中』が作り出されることになります。十年あまりの狂言作者時代の経験は、その後、竹本座の座付作者となって大坂に住居を移した近松の浄瑠璃にも、さまざまな影響を与えていくと言つてよいでしょう。

「平成の藤十郎・中村鴈治郎」 近松劇の復活を目指して

歌舞伎俳優で人間国宝でもある三代目中村鴈治郎氏が、新しい時代の近松劇を創造するために、近松座を結成したのが昭和五十六年。以来、原作の精神を生かした舞台の創造、近松の二大傑作歌舞伎『けいせい仏はつの原』『けいせい壬生大念仏みぶつ』の復活上演など、数々の実績を積み重ねて、歌舞伎界のみならず、現代の演劇界にも大きな影響を与えてきました。二十周年を迎えた平成十三年には、近松座による初めての海外公演となったイギリス公演を、大成功のうちに終え、シエークスピアの国に近松の名を刻みました。

鴈治郎氏は平成十七年には、念願であった「坂田藤十郎」の襲名が決まっています。藤十郎は、近松の盟友でもあり、上方歌舞伎にあつて「和事わごと」と呼ばれる、男女関係を中心にした柔らかな物腰の演技を創始した大人物です。その名を二百三十一年ぶりに受け継ぎ、今後一層の活躍が期待されます。

近松作品目録

作品名(ふりがな)

○ 存疑作 分類 初演年

備考

近松全集(岩波書店刊) 巻数

| | | | | |
|-------------------------|---|-----------------|---------------------------|----|
| あみだが池新寺町(あみだがいけしんてらまち) | 歌 | 元禄十二(二六九九)年十月 | 本田家の跡取りをめぐるお家騒動物。敦賀の庄も舞台に | 15 |
| 生玉心中(いくだましんじゅう) | 世 | 正徳五(一七一五)年五月 | 茶碗屋の息子嘉平次と遊女おさが生玉社で心中 | 9 |
| 一心二河白道(いっしんにがびやくどう) | 歌 | 元禄十二(二六九八)年盆か | 清弦・桜姫の物語をふまえた異色作。お家騒動物 | 15 |
| 井筒業平河内通(いつつなりひらかわちがよい) | 時 | 享保五(一七二〇)年三月 | 文徳天皇の後継争いに、伊達男在原業平の伝説を加味 | 11 |
| 今川了俊(いまがわりようしゅん) | 時 | 貞享四(一六八七)年正月 | 南北朝時代の武將了俊の後継をめぐるお家騒動物 | 1 |
| 今源氏六十帖(いまげんじろくじゅうじょう) | 歌 | 元禄八(一六九五)年一月 | 美貌の長男をめぐるお家騒動物。妹姫の猫まねが特色 | 15 |
| 新小町栄花車(いまこまちえいがぐるま) | 歌 | 元禄十四(一七〇二)年十一月か | 京の春永家に嫁ぐ住の江姫をめぐるお家騒動物 | 16 |
| 今宮の心中(いまみやのしんじゅう) | 世 | 正徳元(一七一二)年夏 | 手代二郎兵衛と針子おきさが今宮戎の森で心中 | 7 |
| 以呂波物語(いろはものがたり) | 時 | 貞享元(一六八四)年三月 | 藤原光照というは姫を襲う幾多の危機を空海が防ぐ | 13 |
| 卯月の潤色(うづきのいろあげ) | 世 | 宝永四(一七〇七)年四月 | 『卯月紅葉』で助かった夫と妻(亡霊)との交流を描く | 4 |
| 卯月紅葉(うづきのもみじ) | 世 | 宝永三(一七〇六)年夏 | 古道具屋おかめ・与兵衛の珍しい夫婦心中物 | 4 |
| 浦島年代記(うらしまねんだいき) | 時 | 享保七(一七二二)年三月 | 浦島伝説と安康天皇の讓位騒動をからめた物語 | 12 |
| 悦賀楽平太(えがらのへいた) | 時 | 元禄五(一六九二)年正月 | 悦賀楽平太は姫を奪われた足立景盛と悪人を討つ | 13 |
| 烏帽子折(えぼしおり) | 時 | 元禄三(一六九〇)年正月 | 牛若丸が平家の追求を逃れ挙兵するまでの物語 | 2 |
| 大磯虎稚物語(おおいそのとらおきなものがたり) | 時 | 元禄七(二六九四)年七月以前 | 曾我物の一つ。虎御前とその兄の仇討ちを描く | 2 |
| 大塔宮曦鑑(おおとうのみやあさひのよろい) | 時 | 享保八(一七二三)年二月 | 竹田出雲らの作を近松が添削。護良親王の活躍を描く | 14 |
| 大原問答(おおはらもんどう) | 時 | 元禄初年頃 | 平敦盛の青葉の笛、法然の大原問答の逸話で構成 | 13 |

音曲百枚笹(おんぎよくひやくまいざさ)

御曹司初寅詣(おんぞうしはつとらもつで)

女殺油地獄(おんなころしあぶらのじごく)

娥歌かるた(かおよつたがるた)

賀古教信七墓廻(かこのきょうしんなはかめぐり)

春日仏師枕時鶏(かすがぶつしまくらどけい)

加増曾我(かぞうそが)

鎌田兵衛名所盃(かまたひょうえいしよのさかずき)

上京の謡始(かみぎようのうたいぞめ)

からさき八景屏風(からさきはつけいのびょうぶ)

関八州繫馬(かんはつしゅうつなぎうま)

木曾街道幽霊敵討(きざかいとううれいかたきうち)

吉祥天女子産玉(きしやうてんによこやすのたま)

けいせい阿波のなると(けいせいあわのなると)

けいせいゑどぎく(けいせいえとぎく)

けいせい懸物揃(けいせいかけものぞろえ)

傾城金龍橋(けいせいきんりゅうのはし)

けいせいぐぜいの舟(けいせいぐぜいのふね)

傾城島原蛙合戦(けいせいしまはらかいるがっせん)

時 正徳四(一七二四)年九月以後 竹本筑後掾の追善作。浄瑠璃の題を本文に織り込む 9

歌 元禄十四(一七〇二)年一月 義経をねらう頼朝方の武将。静御前は義経の身代わりに 16

世 享保六(一七二二)年七月 油屋の息子与兵衛が、向かいの油屋の女房を殺害 P.24 12

時 正徳四(一七二四)年九月以前 中宮の女官横笛と滝口の恋物語。絵島事件の当込 8

時 未詳(盆興行) 大蜘蛛・幽霊などが登場。賀古兄弟をめぐる怪異譚 9

歌 宝永元(一七〇四年)十一月か十二月 二巻途中まで残存。唐から来た夫人をめぐるお家騒動物 16

時 宝永三(一七〇六年)四月以前 前作の『本領曾我』の八年余り後の展開を描く 4

時 正徳元(一七二一年)正月以前 上下二巻。保元の乱での源義朝・平清盛の確執を描く 6

歌 元禄十一(一六九八年)一月 上巻のみ残存。百合若大臣の三人の娘が登場 15

歌 元禄十六(一七〇三年)五月か 唐崎の松での心中話に、劇中劇の心中物をはさむ 16

時 享保九(一七二四年)正月 近松の絶筆。源頼光と四天王が平将門の子らを討つ 12

歌 宝永二年(一七〇五年)五月か 其二途中まで残存。作者名はなし。更科家のお家騒動物 16

歌 宝永元(一七〇四年)十一月か 恋の争い、善人悪人がだまし合う賑やかなお家騒動物 16

歌 元禄八(一六九五)年(二の替) 法隆寺の仏舍利開帳を当て込んだお家騒動物 15

歌 元禄十一(一六九八年)一月(二の替) 中下巻のみ残存。善三郎とけいせいの妹の敵討物 15

時 正徳二(一七二二年)三月 藤原秀郷が数々の難を越えて平将門を討つ 7

歌 宝永二(一七〇五年) 橋立家のお家騒動物。水・雪といったたからくりを多用 16

歌 元禄十三(一七〇〇)年(二の替) 作者名はなし。箱崎家の三人の息子をめぐるお家騒動物 16

時 享保四(一七一九)年十一月 天草四郎の島原の乱を当て込んだ異色作 11

| | | | | |
|-----------------------------|---|--------------------|-----------------------------|----|
| 傾城酒呑童子(けいせいしゅてんどうじ) | 時 | 享保三(一七一八)年十月 | 『酒呑童子枕言葉』を改作。遊女屋の処罰事件の当込 | 10 |
| けいせい反魂香(けいせいはんこんこう) | 時 | 宝永五(一七〇八)年 | 敦賀を舞台に開幕。上巻のみ「吃又」として人気 p.38 | 5 |
| けいせい富士見る里(けいせいふしみるさと) | 歌 | 元禄十四(一七〇二)年春(二の替) | 小野篁の八百五十年忌に因んだ、小野家のお家騷動物 | 16 |
| けいせい仏の原(けいせいほとけのはら) | 歌 | 元禄十二(一六九九年)一月(三の替) | 越前三国を舞台。梅水文蔵の廓での長話で有名 P.28 | 15 |
| けいせい三の車(けいせいみつくるま) | 歌 | 元禄十六(一七〇三年) | お家騷動物。傾城野風は死後も幽霊となり子を守る | 16 |
| けいせい壬生大念仏(けいせいみぶだいなんぶつ) | 歌 | 元禄十五(一七〇二年)一月(二の替) | 劇中劇での壬生狂言、若殿の廓での長話等が見所 | 16 |
| 傾城吉岡染(けいせいよしおかぞめ) | 時 | 宝永七(一七一〇)年三月以前 | 吉岡流剣法の祖・吉岡憲法と石川五右衛門が登場 | 5 |
| けいせい若むらさき(けいせいわかむらさき) | 歌 | 不詳 | 中下巻のみ残存。お家騷動物で藤十郎の一人狂言あり | 16 |
| 兼好法師物見車(けんこうぼつみぐるま) | 時 | 宝永七(一七一〇)年 | 上下二巻。「孕常盤」の後編か。義経と淨瑠璃姫の悲恋 | 6 |
| 源氏れいぜい(げんじれいぜい) | 時 | 宝永七(一七一〇)年 | 上下二巻。「孕常盤」の後編か。義経と淨瑠璃姫の悲恋 | 6 |
| 弘徽殿鶉羽産家(こうきでんのうのはのうぶや) | 時 | 正徳四(一七二四年)九月以前 | 花山院の後懐妊にからむ陰謀を安倍清明らが阻む | 9 |
| 国性爺合戦(こくせんやかつせん) | 時 | 正徳五(一七二五年)十一月 | 空前の大当たりを取った傑作。英雄鄭成功の活躍 p.42 | 9 |
| 国性爺後日合戦(こくせんやごにちかつせん) | 時 | 享保二(一七一七年)二月 | 『国性爺合戦』の後日話。前作とは違い不当たり | 10 |
| 五十年忌歌念仏(ごじゅうねんきうたねんぶつ) | 世 | 宝永四(一七〇七年)七月以前 | 井原西鶴の「好色五人女」と同じ密通事件に取材 | 4 |
| 碁盤太平記(ごばんたいへいき) | 時 | 宝永七(一七一〇)年 | 『兼好法師物見車』の下巻。忠臣蔵物として注目される | 6 |
| 彌山姥(こもちやまんば) | 時 | 正徳二(一七二三年)九月以前 | 山姥に育てられた坂田金時が、源頼光と鬼を退治 p.40 | 7 |
| 最明寺殿百人上臈(さいめいじうどのひゃくにんじうろう) | 時 | 元禄十二(一六九九年)三月頃 | 上下二巻。北条時頼の有名な地方視察の旅に取材 | 3 |
| 嵯峨天皇甘露雨(さかてんのうのかんるあめ) | 時 | 正徳四(一七二四年)九月以前 | 帝位をねらう大海原の王子を、弘法大師が打ち破る | 9 |
| 相摸入道千疋犬(さきがみにゆうどうせんびきのいぬ) | 時 | 正徳四(一七二四年)年秋以前 | 新田兄弟が犬の白石と、犬公方・北条高時を討つ | 8 |

佐々木先陣(ささきせんじん)

薩摩歌(さつまつた)

薩摩守忠度(さつまのかみただのり)

三世相(さんぜそう)

持統天皇歌軍法(じとうてんのうたくんぽう)

釈迦如来誕生会(しゃかによらいたんじようえ)

十二段(じゅうにだん)

出世景清(しゅつせかけきよ)

酒吞童子枕言葉(しゅてんどうじまぐらのことのは)

主馬判官盛久(しゅめのはんがんもりひさ)

聖徳太子絵伝記(しょうとくたいしえでんき)

女郎来迎柱(じよろうらいごうばしら)

心中重井筒(しんじゅうかさねいづつ)

信州川中島合戦(しんじゅうかわなかじまがつせん)

心中天の網島(しんじゅうてんのあみじま)

心中二枚絵草子(しんじゅうにまいえぞうし)

心中万年草(しんじゅうまんねんそう)

心中刃は氷の朝日(しんじゅうやいはこおりのついたち)

心中宵庚申(しんじゅうよいこうしん)

時 貞享三(一六八六)年七月 藤戸の先陣争いの後日譚。作者名を初めて記した作

世 未詳 正徳元(七二二年)正月以前 流行歌にも歌われたおまん・源五兵衛の心中を取材

時 貞享三(一六八六)年十月 歌人として有名な忠度と岡部六弥太をめぐる物語

時 貞享三(一六八六)年五月 新町の有名な遊女夕霧太夫の九年忌に上演

時 正徳四(七二四)年夏以前 「春過て」の歌も登場。持統天皇の後継争いの物語

時 正徳四(七二四)年秋以前 悟りを開き、後に釈迦如来となる悉達太子の生涯

時 元禄十二(六九八)年正月以前 源義経Ⅱ牛若丸の鞍馬山出奔前後の物語

時 貞享二(一六八五)年(二)の替 竹本義太夫に書いた初作。平家の落人が主人公 p.36

時 宝永七(一七一〇)年五月以前 鬼退治物。酒吞童子の身の上話の場面で有名

時 享三(一七二七)年十一月 『薩摩守忠度』の続編。平家の侍大將盛久が主人公

時 享保二(一七二七)年十一月 物部守屋を枕天王の教えを得た聖徳太子が討つ

歌 元禄十五(一七〇二)年 傑作歌舞伎『けいせい壬生大念仏』の続編

世 宝永四(一七〇七年)十一月か十二月 夫思いの妻がいながら、遊女お房と心中する徳兵衛

時 享保六(一七二二)年八月 武田・上杉の戦いを自由に脚色。山本勘介が活躍

世 享保五(一七二〇)年十二月 妻の思いを外に夫治兵衛と遊女小はるは心中 p.22

世 宝永三(一七〇六)年二月以前 遊女お島・市郎右衛門が別々の場所で同時に心中

世 宝永七(一七一〇)年四月 高野山女人堂での心中事件と八百屋お七譚に取材

世 宝永六(一七〇九)年盆以前 郷里に帰る遊女小かんと平兵衛が別離を苦に心中

世 享保七(一七二二)年四月 八百屋半兵衛と妻千世が姑に離縁を迫られ心中 p.26

せみ丸(せみまる)

善光寺御堂供養(ぜんこうじみどうくよう)

千載集(せんざいしゅう)

曾我扇八景(そがおうきはっけい)

曾我会稽山(そがかいけいざん)

曾我五人兄弟(そがごにんきょうだい)

曾我虎が磨(そがとらがいしうす)

曾我七以呂波(そがななついろは)

曾根崎心中(そねざきしんじゅう)

大覚大僧正御伝記(女人即身成仏記)

大経師昔暦(だいききょうじむかしこよみ)

大職冠(たいしよかん)

大名なくさみ曾我(だいまようなくさみそが)

田村將軍初観音

(たむらしょうぐんはつかんのん)

他力本願記(たりにきほんがんき)

團扇曾我(だんせんそが)

時 元禄六(一六九三)年二月以前「逢阪の関」の歌でも知られる蟬丸の数奇な運命 2

○時 享保三(一七一八)年十二月「添削」近松と記す。善光寺如来の開帳時に上演か 14

時 貞享三(一六八六)年頃 『薩摩守忠度』と多くの部分が類似。先行作か 1

時 正徳元(一七二二)年正月以前 敵討ち場面ではなく、死傷者の行列で見せる趣向 7

時 享保三(一七一八)年七月 最後の曾我物。出来事が一日の間に終わる 10

時 元禄十二(一六九九)年 敵討ち前の曾我兄弟とその姉兄弟らが登場 3

時 正徳元(一七二二)年正月以前 題は曾我の五郎が石臼を引く老母を見る場面による 7

時 元禄十一(一六九八)年正月以前 曾我兄弟、遊女虎御前らの敵討ち前後の活躍を描く 2

世 元禄十六(一七〇三)年五月 最初の世話物。遊女おはつ・徳兵衛の心中物 p.16 4

(だいかくたいそうじょうごでんき(よにんそくしんじょうぶつき))

時 元禄四(一六九二)年 宇治座上演の『女人即身成仏記』を竹本座用に改作 2

世 正徳五(一七一五)年春 大経師の妻おさん・手代茂兵衛は偶然、姦通を犯す 9

時 正徳元(一七二二)年十月初後 野に下った大職冠・藤原鎌足が蘇我入鹿を討つ 7

歌 元禄十(一六九七)年七月 上下二巻。大名が『世継曾我』のパロディを演じる 16

○時 元禄十一(一六九八)年正月・正徳四(一七二四)年九月

上下二巻。坂上田村丸が観音の加勢で朝敵を討つ

○時 延宝七(一六七九)年四月 お家騒動を悲嘆し出家した信空は、法然と出会う 13

時 元禄十三(一七〇〇)年 『百日曾我』と初〜四段が共通。宇治座で上演 3

丹波与作待夜のこむろぶし

(たんばよさくまつよのこむろぶし)

津国女夫池 (つのおくにめおといけ)

津戸三郎 (つのとこのさぶろう)

つるがの津三階蔵 (つるがのつさんがいぐら)

天鼓 (丹州千年狐) (てんこたんしゅうせんねんぎつね)

天智天皇 (てんじてんのう)

天神記 (てんじんき)

唐船嘶今国性爺 (とうせんばなしいまこせんや)

当流小栗判官 (とうりゅうおくりはんがん)

融の大臣 (とおるのおとし)

長町女腹切 (ながまちおんなはらきり)

日親上人德行記 (にっしんしょうにんとくぎょうき)

日本西王母 (南大門秋彼岸)

(にっぽんせいおうぼ(なんだいまんあきのひがん))

日本振袖始 (にっぽんふりそでのはじまり)

猫魔達 (ねこまた)

博多小女郎波枕 (はかたこじょうなみまくら)

孕常盤 (はらみときわ)

世 宝永四(一七〇七)年末

武家の乳母滋野井が生き別れた子と再会する人情話

時 享保六(一七二二)年二月

足利家のお家騒動に、女夫池での心中がからむ

時 元禄二(一六八九)年五月

源平合戦時の武者達とその家族の人間模様を描く

歌 元禄十二(一六九九)年七月

『けいせい仏の原』の続々編。越前敦賀が舞台

時 元禄十四(一七〇一)年

『丹州千年狐』の改作。宝物の太鼓をめぐる話

時 元禄五(一六九二)年三月以前

天智天皇の即位をめぐる争いをスケール豊かに描く

時 正徳四(一七一四)年正月

藤原時平の陰謀で大宰府に流された菅原道真の復讐

時 享保七(一七二二)年正月

前年に台湾で起こった朱一貴の乱を早くも劇化

時 正徳四(一七二四年)九月以前

説経浄瑠璃で知られる小栗判官の物語に取材

時 元禄六(一六九三年)正月以前

古今集の「みちのくの」の歌で有名な源融が主人公

世 正徳二(一七一二年)秋

刀職人半七の叔母は甥の罪を償うため腹を切る

時 元禄初年頃

菊虎丸Ⅱ日蓮宗の高僧日親上人の伝記物

時 元禄末年頃

『南大門秋彼岸』の改作。西王母の桃の霊験譚

時 享保三(一七二八年)二月

宝剣を探す素戔鳴尊が八岐大蛇を退治する

時 元禄十(一六九七年)頃

近松「添削」と記す。猫の化身がさよ照姫を悩ます

世 享保三(一七二八年)十二月

海賊が登場する異色作。上巻は「毛刺」の名で有名

時 宝永七(一七二〇)年閏八月

清盛の子を宿した常盤の悲劇。牛若丸、弁慶が活躍

姫蔵大黒柱(ひめぐらだいこくばしら)

歌 元禄八(二六九五)年十一月 姫蔵家の腹違いの姫君二人をめぐるお家騒動物

百日曾我(ひやくにちそが)

時 元禄十三(二七〇〇)年 『团扇曾我』と初く四段が共通。竹本座で上演か

福寿海(ふくじゅかい)

歌 元禄十二(二六九九)年十一月 竹内家の腹違いの二人の姫君をめぐるお家騒動物

双生隅田川(ふたごすみだがわ)

時 享保五(一七二〇)年八月 謡曲「隅田川」を改変。双子の兄弟をめぐるお家騒動物

磔静胎内措(ふたりしずかたいないさぐり)

時 正徳三(一七二三)年閏五月 義経の妻・静が生んだ若君を頼朝の追っ手が狙う

仏母摩耶山開帳(ぶつもまやさんかいちよう)

歌 元禄六(一六九三)年春 知られるうち最も早い歌舞伎作品。お家騒動物

文武五人男(ぶんぶごにんおとこ)

○ 時 元禄七(一六九四年七月以前 子四天王と呼ばれる源氏の武者たちが活躍

平家女護島(へいけによこのしま)

時 享保四(一七一九)年八月 平家物語に取材。二段の鬼界ヶ島「俊寛」で有名 p.44

豊年秋の田(ほうねんあきのた)

時 正徳五(一七二五)年九月 『天智天皇』の増補改作。竹本筑後掾一周忌追善興行

仏御前扇軍(ほとけこぜんおうぎいくさ)

○ 時 享保七(一七二二)年九月 松田和吉作を近松が添削。仏御前へ横恋慕する清盛

堀川波鼓(ほりかわなみのつづみ)

世 享保三(一七二〇)年、享保四(一七二一年) 因幡藩士の妻おたねの密通事件に端を発した悲劇

本朝三国志(ほんちしようさんこくし)

時 享保四(一七一九)年二月 久吉(秀吉)が光秀を討ち、高麗征伐を行うまでの物語

本朝用文章(ほんちしようぶんししよう)

時 未詳(元禄十一(二六九八年正月以前) 日野資朝家を襲う陰謀を断つため一子阿新丸が活躍

本領曾我(ほんりようそが)

時 宝永三(一七〇六年四月以前 『加増曾我』とともに二日間に渡り上演された曾我物

まつかぜ(まつかぜ)

○ 歌 元禄十三(一七〇〇)年 作者名はなし。松風・村雨の物語をからめたお家騒動物

松風村雨束帯鑑(まつかぜむらさめそんいかのみ)

時 宝永四(一七〇七年暮以前 松風村雨の物語に浦島伝説を絡めた夢幻的な作品

水木辰之助餞振舞(みずきたのすけたちぶるまい)

歌 元禄八(二六九五年九月か十月 名女形・水木辰之助の暇乞い興行。お家騒動物

源義経将基経(みなもとのをしつねしよききよ)

時 正徳元(一七一一年正月以前 北に落ちる義経。将棋の駒で戦術を語る場面が有名

壬生秋の念仏(みぶあきのねんぶつ)

○ 歌 元禄十五(一七〇二年秋 作者名はなし。『けいせい壬生大念仏』の続々編

16

6

15

5

16

4

3

11

4

14

2

11

13

15

8

11

15

3

15

冥途の飛脚 (めいどのひきやく)

絶狩剣本地 (もみじがりつるぎのほんじ)

百夜小町・夕ぎり七ねんき

(ももよこまち・ゆうぎりしちねんき)

盛久 (もりひさ)

山崎与次兵衛寿の門松

(やまざきよじべえねびきのかじまつ)

日本武尊吾妻鑑 (やまとたけのみことあずまかがみ)

鐘の権三重帷子 (やりのこんざかさねかたびら)

夕霧阿波鳴渡 (ゆうぎりあわのなると)

雪女五枚羽子板 (ゆきおんなこまいはこいた)

百合若大臣野守鏡 (ゆりわかだいじんのもりのかがみ)

用明天王職人鑑 (ようめいてんのうしよくにんかがみ)

吉野忠信 (よしのただのぶ)

吉野都女楠 (よしののみやおんななくすのき)

世継曾我 (よつぎそが)

淀鯉出世滝徳 (よどいしゆつせのたきのぼり)

世 正徳元(一七二二)年七月以前 飛脚屋の忠兵衛が公金を盗み遊女梅川と逃げる p.18 7

時 正徳四(一七二四)年(顔見世) 平惟茂が天皇から賜った平国の剣をめぐる物語 9

歌 元禄十(一六九七)年盆興行の次の上演 小野小町が出る『百夜小町』に『夕ぎり・』が続く 15

時 『主馬判官盛久』(貞享三(一六八六)年十月〜貞享四(一六八七)年正月)以後 『主馬判官盛久』と多くの部分が類似。改作か 1

世 享保三(一七一八)年正月 与次兵衛と遊女あづまの恋愛と人々の葛藤を描く 10

時 享保五(一七三〇)年十一月 日本武尊が姫として登場? 武勇知略で朝敵を討つ 11

世 享保二(一七一一)年八月 上下二巻。権三は茶の師匠の妻との不義を疑われ逃亡 10

世 正徳二(一七一一)年初春 夕霧の三十五年忌をしのぶ作。改作が「廓文章」 p.20 7

時 宝永五(一七〇八)年正月 死んだ腰元が雪女となり將軍暗殺の陰謀をあばく 5

時 正徳元(一七一)年初秋以前 孤島に置き去りにされた百合若が敵を打ち凱旋する 7

時 宝永二(一七〇五)年十一月か 竹本座新体制初の興行作。仏教と外道の争いを描く 4

時 元禄十(一六九七)年七月以前 平家滅亡後の義経の悲劇と忠臣佐藤忠信の活躍を描く 2

時 宝永七(一七一〇)年 足利と楠・新田の戦いに取材。武将の妻たちが活躍 6

時 天和三(一六八三)年九月 曾我兄弟の仇討ち後の物語。最初の確実な近松作 1

世 宝永五(一七〇八)年末〜六(一七〇九)年新春 上下二巻。豪商淀屋の財産没収・追放事件に取材 5

資料提供一覧

頁 写真内容

撮影者

提供

| | | | |
|----------|-----------------------|--------|----------------|
| 7 | 中村鷹治郎氏写真 | | |
| 8 | 『嬬山姥』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 9 | 『大経寺昔暦』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 17 | 『曾根崎心中』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 18 | 『冥途の飛脚』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 21 | 『夕霧阿波鳴渡』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 23 | 『心中天の網島』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 25 | 『女殺油地獄』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 26 | 『心中宵庚申』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 28 | 『二十四輩順拜図会』から「三国遊女町の図」 | | 三国町 |
| 35 | 『けいせい仏の原』舞台写真 | 岩田アキラ氏 | 株式会社アロープロモーション |
| 37 | 『出世景清』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 38 | 『けいせい反魂香』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 40 | 『嬬山姥』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 42 | 『国性爺合戦』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 44 | 『平家女護島』舞台写真 | 三宅晟介氏 | 尼崎市 |
| 50 51 | 『七福神宝入船』舞台全景写真 | | 国立文楽劇場 |
| 60 | 国立文楽劇場外観写真 | | 国立文楽劇場 |

あとがき

「ちかまつうるる読本」の第一巻「近松を味わう」を発刊いたします。この「近松を味わう」では、近松作品の紹介を中心とし、文楽や歌舞伎についても触れました。近松作品は、浄瑠璃・歌舞伎を合わせると百五十点余にも上るため、どの作品を紹介すべきか迷いました。そこで、さばえ近松倶楽部会員のアンケートを参考にして、収録作品を選びました。何分、ページに限りがあり、このような形になりました。近松作品を側面から理解するには、なんといいっても直接文楽・歌舞伎を見ることです。この本では、文楽観劇の手引きも記しました。巻末には、作品一覧と簡単な紹介を付しておきましたので、ご利用ください。

人間国宝中村鴈治郎氏には、揮毫きじょうをもって本書を飾っていただき、また人間国宝の吉田文雀氏には、「近松と文楽」について語っていただきました。厚く

お礼を申し上げます。

本書の編集にあたり、園田学園女子大学近松研究所の佐藤彰所長、同研究所の水田かや乃、井上勝志の両先生には終始、懇切なご指導をいただき、「近松の歌舞伎」についても、ご執筆いただきました。記してお礼申し上げます。また、福井大学教授三好修一郎先生には、さばえ近松倶楽部顧問として、献身的なご支援をいただいております。ここに、お世話いただきました諸先生方に重ねてお礼申し上げます、今後のご指導をお願い申し上げます。

さばえ^{ちからんぐん}近松倶楽部

平成十四年三月



近松の情いづにふれあうまち 鯖江

「ちかまつうるる読本」

ザ・近松ちかもんくん ～鯖江発～ 第1巻『近松を味わう』

平成14年3月 発行

監修 ————— 園田学園女子大学近松研究所

編集・発行 — さばえ近松ちかもんくん 倶楽部

鯖江市教育委員会 文化課

福井県鯖江市西山町13-1

〒916-8666 電話 (0778) 51-2200

デザイン・印刷 — 株式会社エクシート

この本は再生紙を使用しています。



